

2月16日
パワーセンター

大瀬の小さな動きに大きな共感の拍手！！

★★★ タガ屋吉三郎さん最上川フォーラムのステージで活動報告！！★★★

今の私たちの小さな活動を報告させていただきます。

私たちの住む大瀬は、今から 314 年前、西村久左衛門が黒滝を切り開いてから、鉄道や道路が整備されて舟運がなくなるまでの間、米沢藩と最上藩の境ということもあって、大変にぎわったところでした。

しかし、今は、家の数も 18 戸に減ってしまい、年寄りだけが多い集落になってしまいました。数年前までは毎年開かれていた新年会も、いつの間にかなくなってしまい、何となく元気がなくなっていった大瀬でした。

ところで、最近になって、新聞やテレビなどで最上川を世界遺産にという話をときどき目や耳にするようになってまいりました。

こうした中で、最上川がこんなにすばらしいものなどと思っていなかったのですが、大瀬は目の前の最上川と深い関わりを持ってきた集落だということは、地区に残る伝説や親からの話でみんな知っています。

だったら、この機会に自分たちの思い出や昔語りをやろうということになって、今まで 2 回ほど 20 人位ずつ集まって、お茶飲み会をしました。

◆参加していた役場・まちづくり推進課長のコメント

200 名近い聴衆の中、地域の想いや現状を率直に発表された五十公野さんの報告は大変意義深く、多くの方々の心に響いたものと思っております。

今、最上川は世界遺産登録に向け全国から注目されていますが、今日に至る歴史の中で、私たちが忘れてならない大切なもの、守っていかなければならない大切なものを思い起こさせてくれました。

発表後、会場から惜しみない大きな拍手が起こりましたが、この拍手は発表に対する賞賛の拍手と、「頑張れ！俺たちも応援するぞ」という拍手だ

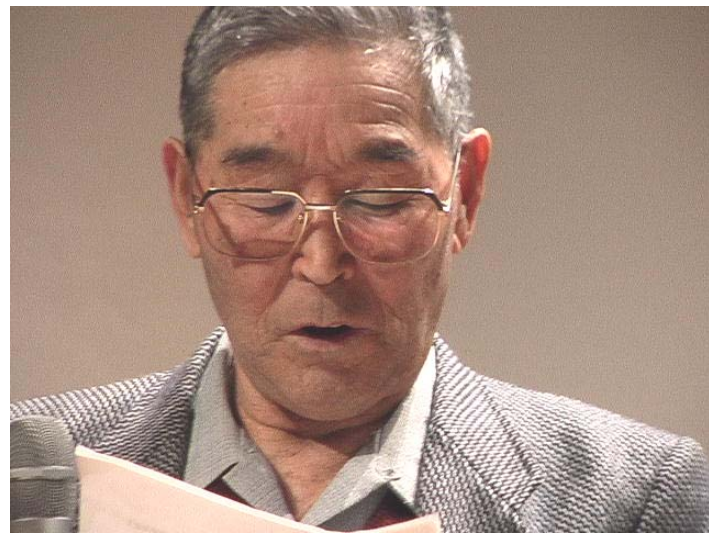
この 2 月 3 日には、役場から饅頭の差し入れをもらって（会場笑い）、史談会の江口会長さんから大瀬の歴史について勉強会をしたところです。

その時、「大瀬のように稲荷神社、

甘酒地蔵、お不動様などたくさんの神社や祠を持っている集落は数少ない。これは、先人の、集落は小さくともその中でまとまりの強さを今に残しているものだ。」と教えられ、大変元気づけられました。

こうしたことを糸口に、限界集落に近い私たちの集落ですが、地域づくりにも目を向けてみようという動きも少しずつ出ています。

こんな今の大瀬ですが、皆様のこれからの応援をお願いして、報告とさせていただきます。（会場拍手）



ったものと思います。この世界遺産登録の動きをチャンスとして捉え、舟運で賑わい、何事に対してもまとまりの強かった先人から学びながら、地域づくりに取組んでいただきたいと思います。

町では、大瀬が抱えている課題は大瀬に限らず、今後多くの集落で取組まなければならない課題として捉えています。平成 20 年度には町も一緒になって大瀬の取り組みを勉強させていただき、今後のまちづくりの施策に活かしていきたいと考えておりますのでよろしく願いいたします。



「大瀬の今を語る」 集会開催 !!

3月9日(日) 於 大瀬公民館 午後 1 時 30 分～
午後 4 時 30 分(予定)

*** 奥山龍雄氏(下山)講演会も同時開催!! ***

最上川の世界遺産登録に向け、その動きが徐々に活発化する中で、舟運当時の要所であった大瀬地区は、最上川沿いに舟道なども残る貴重な地区として、今後いろんなところからの注目が集まることも予想されます。

三回目となる今回の集会は、「大瀬の今を語る」と題して、右記の日程で開催いたします。

当日は、下山在住・奥山龍雄氏の「最上川について」の講演会も行われます。是非、みなさんお誘い合わせの上、ご出席下さい。

《当日の日程》

- | | |
|-------|---|
| 13:30 | *開 会
*講演『最上川について』 講師 奥山龍雄氏(下山)
※なつかしの“龍雄節”。役場の連中も楽しみです!! |
| 14:30 | *『大瀬の今を考える』
～ あなたは大瀬が好きですか？嫌いですか？～
※大瀬に暮らす皆さんが大瀬のことをどのように思っているのか……。役場の職員が皆さんの率直な考えをお聞きし、まとめる作業を行います。
*本日のまとめ |
| 16:30 | *閉 会(予定) |

最上川を 世界遺産に

20.2.16
パワーセンター

去る2月16日、荒砥のパワーセンター白鷹において「美しい山形・最上川フォーラム」の開催する講演会が開催された。

『最上川を世界遺産に』をテーマとしたこの講演会では、第一部で山形県の最上川世界遺産登録へ向けた取り組みや県の考え方などを紹介、第二部では世界遺産、観光と地域に関して広島大大学院のフク・カロン准教授の講演も行われたほか、講演会の最後には五十公野吉三郎さんも大瀬の活動報告を行い、満場の拍手に包まれた講演会となった。

***** 美しい山形・最上川フォーラム講演会 *****

文化的景観とは

最上川は、米沢市「火焰（ひのほえ）の滝」を源として、全町229km、日本海酒田に注ぐ日本有数の大河である。

最上川の特徴は、流域に数百年に渡って自然に人間が働きかけてつくられてきた景観（文化的景観）が日本でも最も良い状態で今に保存されていることである。

黒滝から始まって、大江町にもつながるといわれる大規模な人の手による舟道の開削は、文化財として白鷹町などがその指定をめざして運動を進めるべきであろう。

また、舟運の要衝には、大小の船屋敷などが置かれた。現在の菖蒲にあった「正部船屋敷」は川絵図にも描かれており、大瀬の舟番所では往来する舟から税金を徴収した。

五百川溪谷の河岸に残る舟を曳いた道は、大瀬集落の真下で、ダムによって水かさが増した中に見え隠れしている。

また、舟運の要衝には、大小の船屋敷などが置かれた。現在の菖蒲にあった「正部船屋敷」は川絵図にも描かれており、大瀬の舟番所では往来する舟から税金を徴収した。

五百川溪谷の河岸に残る舟を曳いた道は、大瀬集落の真下で、ダムによって水かさが増した中に見え隠れしている。

農業と最上川

上杉藩や最上藩で生産された米が、最上川舟運によって日本海を通り上方（大阪・京都）に持ち込まれたと同時に、最上川の水は農業用水堰の整備によって、豊かな実りを約束することになった。白鷹町では東根の諏訪堰や雪舟町から取水する白鷹土地改良区などがある。

上杉藩や最上藩で生産された米が、最上川舟運によって日本海を通り上方（大阪・京都）に持ち込まれたと同時に、最上川の水は農業用水堰の整備によって、豊かな実りを約束することになった。白鷹町では東根の諏訪堰や雪舟町から取水する白鷹土地改良区などがある。

最上川右岸、睦橋のたもとに立って秋の実りの様を見れば、誰もがその雄大な景観と自然と人間が織りなす鮮やかな彩りに目を見張ります。

最上川が山形県の農業発展に大きく貢献する中で、今世界に誇れる米の代表種「ササニシキ」「コシヒカリ」の先祖となった「亀の尾」を庄内の阿部亀治が育種していることは特筆すべきことである。

しかし、最上川は大小の支流とともに氾濫を繰り返し、時には流域住民の生活を根こそぎ破壊して来たことも歴史の事実である。

最上川と神仏

人々は舟運の安全に神仏の加護を求めた。水は他界からの恵みであり、山の峰から里を流れ、

海に注ぐ。その急流・難所には神を祀った。

白鷹町にも最上川の流域には黒滝神社、その対岸、高岡のキュウリの初物を各家が供えた津島神社、下山の庭渡神社、大瀬の稲荷神社等があり、それぞれに川仕事の安全を祈った社であり、ゆかりの言い伝えが残されている。

特に最上川と羽黒神社は深いかかわりがあり、長井市泉の羽黒神社、山口の羽黒神社などには、掘り起こせば、貴重な歴史が浮かんでくるのかも知れません。

[特別寄稿] 箒屋(たがや)吉三郎物語 (下)

私が結婚したのは昭和24年。ちょうどボヤ騒ぎがあつて、近くの公民館で式を挙げたことを今も覚えています。

車などが無い当時、タガ屋はお得意様に泊りがけで仕事をさせてもらいました。今平、大舟木、中山、針生、平田、上郷、大滝・・・今思い出しても数え切れないお得意様がおりました。中山の大木さんには、桐の苗木づくりで財を成した話などをよく聞かせてもらいました。

風呂桶は2～3日かかり、味噌樽、漬物桶、手桶、ふり桶（肥桶）、なんでもお客様の注文次第ということになります。

素人でも大工の真似はできるけれど、タガ屋の真似はできないと昔からいわれてきました。それは下手な技術で桶を作っても中に張った水が漏れて使い物にならないからです。ですから、タガ屋は材料となる材木の素性もちゃんと見抜けるだけの眼力を持っていなければなりません。長い期間、中の水分を保たなければならない味噌桶のようなものは、年輪にそって板を湾曲させる板目を使わなければなりません。

時には、材料に立派な御神木などが手に入りこともあるのですが、これは特に気をつけないといけません。その丸太には、いつの時代かわかりませんが、誰かが髪を振り乱し頭にローソクをかざして、呪い打ちした五寸釘が樹体の中に潜んでいることがあるからです。これに刃物をあててしまえば、刃がこぼれてしまいます。タガ屋道具は曲がりくねったものばかりで、近

くの鍛冶屋では手に負えません。

タガの材料となる竹割りもコツのいるものです。特に見栄えを良くするためのタガの三ツ編みなどは、桶の周囲とタガの締め具合が本当に微妙なもので、勘を頼りの仕事でした。

中には風呂桶を作ってもお客様が金の工面をできず、月々千円の月賦となることもあり、集金も自転車がかげで、空戻りの時などはなんとも情けないものでした。

そして、昭和40年頃になると、世の中には石油を原料にしたプラスチック、ポリ容器があふれ出しました。使い易さと値段の安さにあつというまにタガ屋の仕事は干上がってしまい、せつかくの道具も錆びつく始末でした。

しかし、昭和30年、蚕室の出火などもあつて借金を抱えていたので、そのまま落ち着いている訳にもいかず、北海道に出稼ぎに出たこともあります。一時期は、子どもを親に頼んで夫婦で行ったこともあります。ちょうど仕事が、丸い橋脚造りだったので、タガ屋の経験が皮肉にも役立ったのでした。

よく商売は、先代の苦勞が身についていない3代目が身代を潰すなどということを行います。私も3代目ですが、懸命にタガ屋として夢中になって働きました。しかし、石油で作ったプラスチックが世に溢れるようになって、あつという間に商売は終わりを迎えました。人間一人の努力など、時代の流れというものは何のためらいもなく呑みこんで行くものです。(完)